

私の教育実践～英語ディベートの普及に努めて～

愛媛県立松山南高等学校 校長 池田 哲也

私は昭和61年4月に英語の新採教員として北宇和高校に赴任しました（4年間勤務）。その後松山南高校（13年間）、松山西中学校・中等教育学校（4年間）と勤務したのち、平成19年度から県教育委員会教育指導係指導主事として勤務することとなりました。

教育委員会での仕事は多岐にわたり、私の専門教科である英語に関係する仕事は、ほんの一部でした。生徒のいない職場で授業をすることもできず、寂しい思いをすることもありました。

教育委員会に在職中の平成22年に、英語教育に関する事業を計画することになりました。ちょうどその頃、平成25年度から高校で実施される学習指導要領（外国語（英語））に、「英語の授業は英語で行うことを基本とする」と明記されたことで、全国的に英語の教員から不安の声が多く聞かれるようになっていました。本県でも新しい学習指導要領に対応するための事業を立ち上げることになり、私が事業案を作成したのが、「オール・イングリッシュ実践リーダー養成事業（以下、「オール・イングリッシュ」）」と『英語が使える高校生』育成事業（以下、「英語が使える」）」でした（詳しくは、「教育広報えひめ」184号（平成24年3月）を御覧ください）。

「オール・イングリッシュ」は英語教員向けの研修、「英語が使える」は高校生向けの英語セミナーでしたが、私はこの二つの事業を「英語ディベート」により連携させることにしました。英語教員も生徒もそれぞれ英語ディベートを学び、最終的に県教委主催の英語ディベート大会に指導者や審査員そして選手として参加することで、その成果を示すという流れです。

それまで、英語ディベートといえは、県教委主催の英語教員対象の研修会で、簡易的なものを行う程度であり、ましてや普段の英語の授業で、生徒が英語ディベートを学ぶことは、ほとんどありませんでした。しかし私は、学習指導要領が求める四技能の総合的な活動として、ディベートは最適な言語活動であると確信していました。

大学時代にESSのディベート班に所属し、大会に出場したこともある私でしたが、大会を主催するとなるとどうしてよいか分からず、すでにディベート大会を実施している先進県の教育委員会等に問い合わせ資料を送ってもらうなど、試行錯誤しながら準備を進めました。そして、平成23年12月17日（土）に、愛媛県初の高校生のための英語ディベート大会である、「高校生英語ディベート・コンテスト」を開催することができたのです。

その後3年間は、教育委員会大会運営に携わりましたが、平成26年度の予



算編成では、ディベート大会が全国大会の県予選となるよう変更し、平成26年4月には長浜高校へ教頭として異動となりました。

学校現場に戻ってからは、外部から英語ディベート・コンテストを支える立場として、関わり続けることとなります。過去3年間と同様、県大会の審査員長の立場で、各地区の練習試合へ足を運び、試合の審査を通して助言を行いました。その後、高教研英語部会内に特別委員会として英語ディベート委員会を設置させていただくことになり、県内の意欲的な先生方に集まっていただきました。委員会を設置したおかげで、練習試合がスムーズ開催できるようになり、参加する学校も増えていきました。

また、令和元～3年度の愛媛大学教職大学院勤務の際には、英語ディベートを研究テーマとした研究者としても活動しました。県教委主催の英語ディベート指導者育成のための研修会で講師を務めたり、大会に参加する教員や生徒のための参考資料を執筆したり、今まで以上に英語ディベートに取り組んだ3年間でした。

なお、令和2年度には、新型コロナウイルス感染症の拡大で、全国大会や県大会がオンラインによる開催となりましたが、英語ディベート委員会でオンラインでの開催方法を研究し、練習試合を通じて、教員・生徒にオンラインでの実施方法の周知に努めました。同じく令和2年度には、県大会とは別の初心者向けの「みきゃんカップ英語ディベート大会」を主催するようになり、この2月には4回目の大会を終えたところです。このように、委員会の存在は徐々に大きくなってきたと思います。

英語ディベートには、まだまだ抵抗感（難しい）がある教員・生徒も多いのが現状です。英語ディベートの普及に向けて、今後も自分ができる範囲で取り組んでいきたいと考えています。